

第3分科会「郷土教育の推進」総括表

《基本施策》豊かな心の育成
 《施策》郷土教育の推進

番号	三重県教育ビジョン 「主な取組内容」	現在の取組状況				
		目標	期間	対象	内容・プロセス等	課題
①	○身近な地域や三重県に関わる教材の開発と郷土教育の推進 ○郷土教育への外部人材の活用 ○新県立博物館の整備と活用	教材「三重の文化」、「美し国かるた（仮称）」等を活用し、地域の伝統・文化や自然、産業、人物等に関する学習を行い、関心を高め、郷土を誇りに思う心や郷土三重の良さを発信する力を育成する。 (平成27年度までに、教材「三重の文化」を活用する中学校の割合が100%になることをめざす。)	平成23年度～平成27年度	小中学校の児童生徒	(ア)教材「三重の文化」の活用。 活用の効果やノウハウを公開し、全県的取組として普及させる。 (イ)「美し国かるた（仮称）」の作成。 検討委員会を設置し、作成する。各学校へ配付、授業での活用、かるた大会開催など、定着・普及を図る。 (ウ)「本物文化体験」プログラムの活用促進。 体験学習ホームページを開設した「本物文化体験」プログラムについて、教員への周知、体験学習での活用促進をはかる。学校の意見を踏まえてコンテンツの充実、更新等を行う。	(a)中学生になると地域の歴史や自然に対する関心が著しく減少する傾向（ビジョン課題より）があり、それに対して体験学習等を通じて郷土への関心を高めることが求められるが、教育課程を編成するうえで制約がある。 (b)小中学校における推進、普及啓発に向けて、県としての支援等のあり方を明確にするための、郷土教育の重要性などについての意思共有が十分でない。 (c)郷土教育について考える機会を増やすことが、求められているが、地域の歴史や活躍した人物などに関する教材が不足している。
②	○郷土教育への外部人材の活用 ○地域と連携した郷土教育の推進 ※ ○新県立博物館の整備と活用	地域の産業等の諸分野で活躍する人材や博物館等の社会教育施設を活用し、子どもたちの郷土への愛情や豊かな心を育む。 (平成27年度までに、授業において博物館等の社会教育施設を活用する小中学校の割合、地域の産業や文化活動に従事する方々を招くなど、学習指導に活用する小中学校の割合が、それぞれ100%になることをめざす。)	平成24年度～平成27年度	小中学校の児童生徒 教員 保護者 地域住民	(ア)様々な分野で活躍する人材の活用。 地域の各分野で活躍する人材に講師として授業などに参加していただき、専門的な技術・技能、地域の産業等への興味・関心を高める。 (イ)博物館、資料館等の社会教育施設と連携した取組。 郷土の自然や歴史、文化等を学習する場を提供する。 (ウ)市町等教育委員会や学校への訪問等を行い、取組状況を把握、成果状況を広く県内普及する。 (エ)授業実践研究を委託した5市町における郷土教育の成果を発信する。	(a)地域と連携した郷土教育を全小中学校で推進していくうえで、博物館等の社会教育施設の活用や、さまざまな分野で活躍している人材の確保が十分でない。
③	○地域と連携した郷土教育の推進	地域が一体となり、熊野古道の文化的価値を後世に伝える。	平成22年度～平成26年度	東紀州地域の小中学校の生徒	※東紀州対策局取組事業 (ア)熊野古道にかかる冊子の作成と配布。 地域の小学生に対して、熊野古道について関心を持って知識を深めてもらうため、冊子を作成、配布する。 (イ)熊野古道協働会議の開催。 熊野古道協働会議を開催し、地域が一体となって熊野古道を伝えるための仕組み等を検討する。	(a)学校の体験活動の促進を効率的に支援するための県庁内各部署の連携が不十分である。
④	○農山漁村の地域資源を生かした体験活動の推進	農山漁村での自然体験を通じて子どもたちの自立する力を育むとともに、地域活力の増進を目指す。	平成20年度～平成24年度	受入対象地域	※農水商工部取組事業 (ア)子ども農山漁村交流プロジェクト意見交換会等の開催（他部局との情報共有） (イ)民宿開業支援 (ウ)体験指導者養成講座の開催 (エ)県内外の学校に対するPR	(a)農林漁業体験学習など各学校・行政が持つ郷土教育の手法や進め方について、広報が不十分である。 (b)学校の体験活動の促進を効率的に支援するための県庁内各部署の連携が不十分である。
⑤	○郷土教育への外部人材の活用 ○地域と連携した郷土教育の推進 ※ ○地域の産業に対する理解の促進および望ましい勤労観・職業観の育成 ※	郷土の自然、歴史、産業、文化、芸術について、体験活動等を通して興味・関心を持たせ、学習を深めながら、郷土への愛着や豊かな心を育む。 他地域との異文化交流を進め、コミュニケーション力等を育成する。 (平成23年度から4年間で、外部人材を活用した講演・体験活動をすべての高等学校で行うとともに、毎年度、県全体で報告交流会を開催する。)	平成23年度～平成26年度	高等学校の生徒	(ア)様々な分野で活躍する人材の活用。 地場産業や地域の歴史や伝統文化に関わる人材を学校に招聘し、各教科や特別活動等での講演や体験活動を実施する。 (イ)高校生による交流会等の実施。 毎年度、県全体で高校生が参加する報告交流会を行い、各学校の代表生徒がプレゼンテーションを行う。 (ウ)高校生による地域や小中学校への公開（出前）授業を実施する。	(a)高等学校が集中する地域では、外部人材の確保が困難である。

第3分科会「郷土教育の推進」総括表

《基本施策》豊かな心の育成
《施策》郷土教育の推進

番号	三重県教育ビジョン 「主な取組内容」	現在の取組状況				
		目標	期間	対象	内容・プロセス等	
⑥ (※「キャリア教育の充実」の再掲)	○地域産業に対する理解の促進 および望ましい勤労観・職業観の育成※	地域の特色を生かした職業を体感することにより、地域の産業に対する理解を促すとともに、望ましい勤労観・職業観を育成する。 《県立高校生のうち卒業までにインターンシップを体験する割合》 平成23年度：24.6%（3,176人、平成22年度卒業生）→平成27年度：35%以上	平成23年度～（継続・拡充）	小中高等学校の児童生徒	(ア)小学校での進路探索の基盤形成のための職場見学、中学校での進路の暫定的選択のための職場体験、全ての高校での進路の現実的探索と社会的移行の準備のためのインターンシップの実施。 (イ)インターンシップ受入事業所調査員による受け入れ先の拡大・充実。また「三重県職場体験・インターンシップ受入事業所の案内Webページ」の充実。 (ウ)キャリア教育推進地域連携会議（県内7地域）における、県立高校のインターンシップの効果的な実施方法等の検討。	(a)インターンシップ参加生徒数の拡大や内容の充実を図るには、各高等学校が生徒のインターンシップ参加について、一層積極的に推進することが求められる。 (b)学校と受け入れ先企業との意思疎通が十分でないため、全ての児童生徒がインターンシップ等を体験することが出来ていない現状がある。

《基本施策》学力と社会への参画力の育成
《施策》学力の育成

番号	三重県教育ビジョン 「主な取組内容」	現在の取組状況				
		目標	期間	対象	内容・プロセス等	
⑦ (※「学力の向上」の再掲)	○家庭・地域等との連携の強化※ 【関連する基本施策・施策】 基本施策：信頼される学校づくり 施策：開かれた学校づくり 内容：・コミュニティ・スクール等の活用 ・学校評価システムの充実と浸透	県内において、コミュニティ・スクールや学校評価等の取組が普及・拡大し、保護者や地域住民等多様な主体が学校運営に参画することにより、「学校」が抱える多様な課題を地域と共に共有・解決するなどして、望ましい学習環境を創造し、開かれた学校づくりを進める。	平成23年度～平成27年度	・小学校 ・中学校 ・県立学校	(ア)三重県コミュニティ・スクール推進会議の開催。 コミュニティ・スクールの研究・推進を行っている市町や学校等の関係者が情報共有し、取組の質的充実を図ることにより、三重県内の学校に当該仕組みが普及・定着するようにする。 (イ)コミュニティ・スクール導入研究校に対する、制度の円滑な導入や制度導入後の効果的な運営につながるような情報提供や助言の実施。 (ウ)学校関係者評価の全県立学校での実施。 (エ)学校関係者評価の現状について、市町等教育委員会との情報交換および取組推進の支援。 (オ)教員を対象とした学校評価に関する研修会の実施。 「学校評価ガイドライン」を作成して効果的な推進を図る。	(a)一定の権限と責任を持って学校運営に参画する委員の確保が難しい。 (b)新たにコミュニティ・スクールを導入するメリットが伝わりにくいことから、導入する市町が限られている。 (c)学校関係者評価を有効な評価とするための、評価の本来の目的を踏まえた評価活動が不十分である。

《基本施策》社会教育・スポーツの振興
《施策》文化財の保存・継承・活用

番号	三重県教育ビジョン 「主な取組内容」	現在の取組状況				
		目標	期間	対象	内容・プロセス等	
⑧	○文化財についての情報提供 ○学校教育との連携	埋蔵文化財などの実物に触れたり実体験を伴う学習活動を実施することで、子どもたちの興味・関心を高め、効果的な郷土教育を実施する。 ※現状値（平成22年度） 19件735人 ↓ 目標値（平成27年度） 22件800人	平成23年度～平成27年度	小中高等学校の児童生徒 小中高等学校の教員	(ア)各学校からの要望に応じ、随時、出土品の貸し出しや出前講座を実施。 (イ)発掘調査現場の近接学校を対象に、遺跡見学、遺跡体験発掘を実施。	(a)学校や教員に必要とされる指導上効果的な学習教材の検討が不十分である。 (b)体験した生徒数を増やすためには、学校の年間計画に入れる必要があるが、前年度からの広報が十分でない。 (c)発掘調査現場での見学等については、開発事業者との諸調整の必要から、生徒受入に制約がある。

※は「地域と共に創る学校づくり」のテーマに関する取組内容です。

<議論の柱(論点)について> 議論の状況を踏まえ、委員の意見・提案等について、下記の3つの論点ごとに、整理して取りまとめました。

- ゲストスピーカーの(株)交通新聞社出版事業部長の中村 直美様(松阪市ご出身)の講演では、主に次の5点のご指摘・提言をいただきました。
- 1.三重県は南北に長く旧国名も4つ(伊勢・伊賀・志摩・紀伊)、地域が違えば全く違う文化があり、遠くへ行かなくても近場で異文化体験・交流ができる。
 - 2.特に小学生の時期に色々なものを見て、聞いて、動いて体験することが、将来に向けて効果的であり、重点的に体験を通じた郷土教育を行うべき。
 - 3.教材「三重の文化」は、例えば県広報への抜粋掲載や、小学生向けにリライトするなどの工夫によって、より上手く活用が図れるのではないか。
 - 4.「美し国かるた(仮称)」は、すぐ完成形をめざすよりも、子どもたちの反応も見ながら、長く県全体に浸透していくものを制作すべきではないか。
 - 5.方言は、時を経て風景が変わっても、覚えていて意味が分かる「その土地らしさ」を感じられる素敵なもので、文化教育の中に取り入れると良い。

論点 1 子どもたちの発達段階(幼保・小・中・高)に応じた、学校における郷土教育の推進

意見集約による議論の方向性の整理 = 議論全体の横串となる考え方

- ① 特に小学校教育における郷土教育・体験教育には、子どもにとって印象・記憶に残る強いインパクトがあり、その時期の知識や経験が、その後の学校教育における郷土教育の根幹となる。
- ② 子どもたちが、身近な地域において、様々な体験を、量ではなく質的な面で「本物」に出会い触れる体験を、幼少期～特に小学校における教育カリキュラムの中で出来ることが、将来の人間(アイデンティティ)形成に向けて、大変重要である。
- ③ 郷土教育の推進においては、知識の習得だけではなく、子どもたちが人や社会とのつながりを実感することで、自発的に地域への興味や関心を持ち、それを継続するという視点が重要である。

【具体的方策の検討に向けた提案・意見】

- ① 子どもたちの体験教育においては、親子で一緒に行う体験や、異なる年代・学年間の交流、特に幼少の子が年上の子に「つられ体験」する、といった取組も有意義である。
- ② 子どもが体験に出かけて地域と触れあうことで、子どもを通して地域と家庭がつながるよう、幼稚園・学校は郷土教育の推進を通して、両者のつなぎ役を果たすべきである。
- ③ たとえば地域の食文化などは、調理実習で学んだり、農山漁村への宿泊、試食を通じて体験してみるなど、学校教育の様々な場面で、郷土教育として取り組むことができる。
- ④ 中・高校生の職業体験やインターンシップは、キャリア教育のみではなく、子どもたちが自らの郷土の歴史や文化を知り、愛着を育むという観点からも捉えることができる。
- ⑤ 学校教育の段階ごとに「地域」の捉え方を明確にすべきである。

国際的な視野からみた、特に中学・高校段階における郷土教育の推進

- ① A L T 活用による外国語教育を小学校で充実すれば、中学・高校段階での、郷土の国際的な情報発信など、より高度な取組へと発展させられる。
- ② 地域の食材・食文化は、対外国人も含め、郷土について語り紹介しやすい、人とのつながりを作る上で有用な地域資源である。

論点 2 地域資源や人材の活用

【主な意見(課題や方策検討に向けた提案も含む)】

- ① 伊賀市は、夏休みに芭蕉施設を親子で回る無料スタンプラリーの仕組みや、市博物館には芭蕉、組み紐、忍者等の映像もある。新県立博物館も含め、施設の有効活用が重要であるが、学校等の単位で訪問できるためのバス等の交通手段の確保が課題である。
- ② 鳥羽の恐竜化石などは、同様の化石がある福井への体験ツアー等によって、子どもたちは他所との比較を通じて地元の良さを再認識したり、より学問的な関心・興味を高めている。
- ③ たとえば、松阪や伊賀で盛んな「茶道」なども、地域ごとに特色・違いがあり、同じ道の文化でも、地域によって異なる文化に触れることも、自らの地域への理解を深める上で大事である。
- ④ 子どもたちに、適切な時期に体験の機会を提供できるように、
・絵など一芸に秀でた人や、多様な経験を持つ有能な退職者等
・子どもたちに対して「糸口」を多く持った資質の高い教職員
・保護者、家庭の理解や協力
の確保・活用が重要であり、地域の人材に対しては、取組に参画しやすい仕組みが必要である。
- ⑤ 県の学校や教育委員会だけが担うのではなく、市町、他部局との連携も図りながら、郷土教育を展開していくべきである。
- ⑥ 県が主導的に郷土教育を担う専門人材を養成すべきである。
- ⑦ 市町への人材配置も含め、各市町が学校を支援する体制が要る。
- ⑧ 食材や食文化は、郷土を語りやすい有用な地域資源である。

論点 3 教材コンテンツや情報発信

【主な意見(課題や方策検討に向けた提案も含む)】

- ① 教材「三重の文化」について
ア 全中学生に配布すべきである。自分の子に引き継げる。
イ 映像版があれば、見て聞いて学べて一層良い。高校生による制作を検討してはどうか。
ウ 読み手の関心を喚び惹き付けるようなキャッチコピーや、探求心をくすぐるヒントの一文を入れる工夫も良い。
- ② 教材「美し国かるた(仮称)」について
ア 群馬の上毛かるたに倣って、地域バランスへの配慮よりも後世に伝えたい素材の採用、礼節心得や遊び心をくすぐるルールの説明書きの作成など、を検討してはどうか。
イ 国際的な視点からは、中学生くらい向けには、英語で説明書きを作成するのも一案ではないか。
- ③ 子どもたちの体験機会の拡充のため、「本物文化体験」ホームページ等コンテンツの充実、発信・周知が重要である。
- ④ 中・高校生が、自分が興味を持った素材の動画・映像制作、発信を郷土教育の中で行えば、面白い試みではないか。
- ⑤ 一方的な情報発信ではなく、子どもと対話する双方向、子ども同士など多方向で発信し、実践することが重要である。
- ⑥ マスメディア活用も含め、地域へ積極的に情報発信することで、大人は子どもの関心を知り、人材発掘にもつながる。
- ⑦ 学校においては、個々教員任せでなく、良い事例等について、教職員間でしっかり情報共有することが重要である。

子どもたちのための「郷土教育」の土台とすべき考え方

- 一生にわたって自身の精神的支柱、心の拠り所となる郷土への理解・愛着を深める。
- 国際社会の中で、自信を持って郷土を語れ、発信や対話ができ、活躍できる資質を養う。

第3分科会「郷土教育の推進」の審議における「委員意見」と「具体的方策イメージ」の一覧表

論点 1 子どもたちの発達段階(幼保・小・中・高)に応じた、学校における郷土教育の推進

委員意見	具体的方策のイメージ
<p>幼少～小学校における体験教育・郷土教育の意義</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校における郷土教育・体験教育には強いインパクトがあり、その後の学校での郷土教育の根幹となる。 ・子どもたちが、様々な体験、質的な面で「本物」に触れる体験を、幼少～特に小学校の教育カリキュラムの中で出来ることが、将来に向けても、大変重要である。 ・地域での体験等を通じて人や社会とのつながりを実感し、子どもたちが自発的に興味・関心を持ち続けることが重要である。 	<p>子どもたちの体験活動の推進に向けて、関係主体と連携して取り組む。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 機会の確保・充実のため、学校や地域に出向き「出前体験活動」を実施。 (2) 県・市町、民間団体、企業等が行う体験活動の情報の発信と参加の促進。 (3) 市町、民間団体、企業等の施設と連携し、全県的な機運を醸成。 <p>モデル事業による実践研究を行い、「郷土教育を取り入れたカリキュラム」等の実践報告会や、実践事例集の活用による取組の普及を図る。</p> <p>県内で発掘された埋蔵文化財や地域の文化財を活用して、学校において子どもたちが郷土の文化財を見て、触れて、学べる機会を、市町と連携しながら、作っていく。</p>
<p>子どもが体験に出かけて地域と触れあうことで、子どもを通して地域と家庭がつながるよう、幼稚園・学校は郷土教育の推進を通して、両者のつなぎ役を果たすべきである。</p>	<p>保護者や地域の協力を得て構築したカリキュラムに基づく授業や発表会等を地域へ公開する取組を、市町と連携して実施する。</p> <p>モデル事業による実践研究を行い、「郷土教育推進のための保護者・地域との連携」等の実践報告会や、実践事例集活用による取組普及を図る。</p>
<p>地域の食材・食文化は、調理実習や宿泊体験等の学校教育で郷土教育として取り組み、郷土を語りやすい有用なコンテンツである。</p>	<p>地域の食材や伝統料理についての調べ学習や、地場産物の給食献立への取り入れ等によって、子どもたちの地域の自然・産業・文化等への理解や愛着を育む。</p>
<p>高校生のインターンシップは、キャリア教育のみではなく、郷土の歴史や文化を知り、愛着を育む機会となる。</p>	<p>受入先として、地元の伝統産業、地場産業、観光協会、郷土資料館等の関連事業所の開拓を進め、郷土のよさを学習しながら働く喜びを得る機会を拡大する。</p>
<p>小学校でALTによる外国語教育を充実することで、中学・高校での郷土の国際的な情報発信等の取組へ発展できるのではないかな。</p>	<p>ALTや留学生への英語での郷土紹介、地元観光地等の英語ウェブサイト制作、外国人生徒との英語eメール交換での郷土発信活動、などを進めていく。</p>

論点 2 地域資源や人材の活用

委員意見	具体的方策のイメージ
<p>たとえば、伊賀であれば芭蕉や忍者、それを展示する博物館であったり、鳥羽であれば恐竜化石であったり、地域のそうした資源、施設等を有効に活用することが重要である。</p>	<p>県内で発掘された埋蔵文化財や地域の文化財を活用して、学校において子どもたちが郷土の文化財を見て、触れて、学べる機会を、市町と連携しながら、作っていく。</p> <p>埋蔵文化財センターの出土品や地域の史跡等を題材として、学習教材を開発する。</p>
<p>子どもたちに適切な時期に体験の機会を提供できるためには、子どもたちへの「糸口」を多く持つためにも、学校の教職員の資質の向上が重要である。</p>	<p>学校教職員や市町担当者を対象とする研修等において、郷土教育の意義や重要性を、市町や地域、学校の声も聞きながら教材や展開手法の検討を行う姿勢と併せて丁寧に説明するとともに、県提供コンテンツの積極的な活用を促す。</p>
<p>市町等との連携も図りながら、郷土教育を展開するべきである。人材配置も含め市町が学校を支援する体制づくりが必要である。県主導で、郷土教育の専門人材を養成してはどうか。</p>	<p>モデル事業の実施により、地域資源や人材の具体的活用策を研究し、先進的取組や成果等を県内に普及啓発し、市町と連携して取組の拡大を図る。</p>

論点 3 教材コンテンツや情報発信

委員意見	具体的方策のイメージ
<p>教材「三重の文化」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全中学生への配付、 ・わかりやすい映像版の制作、 ・キャッチコピー、探究心をくすぐる工夫など、をすべきである。 ・高校生による映像版の制作をしてはどうか。 	<p>モデル事業を実施し、市町と連携して「三重の文化」のテーマを取り入れたカリキュラムに基づく実践の報告会開催や、実践事例集の活用による成果普及を図り、県内全体への「三重の文化」を通じた郷土教育の展開を図る。</p> <p>県立高校の総合的な学習の時間や部活動等において映像制作し、小中学校における補助教材としての活用を、市町とも連携して働きかける。</p>
<p>教材「美し国かるた(仮称)」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・後世に伝えたい素材の採用、礼節心得や遊び心をくすぐるルールの説明書きの作成など、の検討・工夫をしてはどうか。 ・中学生以上には、英語での説明書きもよいのではないかな。 	<p>早急に編集プロジェクト会議を立ち上げ、第3分科会での議論を踏まえ、三重を代表するテーマの精選や、制作上の工夫等について検討し、制作を進める。</p> <p>県内への普及と次世代への継承を図るための方策については、たとえば大会の開催なども含め、手法について幅広く検討する。</p>
<p>子どもたちの体験機会の拡充のため、「本物文化体験教育」ホームページなど、さまざまな提供コンテンツの充実・発信・周知が重要である。</p> <p>情報発信が一方的なものとならずに、子どもたちと対話する双方向、多方向でのやり取りとなることが重要である。</p> <p>マスメディア活用も含めて、学校等が地域に対して積極的に情報発信することで、子どもの関心を大人が知り、人材の掘り起こしや子どもたちへの励みなどにもつながっていく。</p>	<p>「本物文化体験教育」ホームページについて</p> <ol style="list-style-type: none"> (1)HPアクセス数の把握、アンケート実施などにより、活用状況の定期的な把握に努めるとともに、それを踏まえた一層の普及・活用策を検討する。 (2)引き続き、県主体のものに限らず、市町やNPO等各地域の団体等が提供・実施するコンテンツやプログラムも含めて、掲載内容の更新や新規開拓を進める。 <p>埋蔵文化財センターの出土品や地域の史跡等を題材として、学習教材を開発する。</p> <p>これまでの出前講座の内容を充実し、学校の授業等において、既存の文化財をいかした体験や歴史学習等を実施する。</p> <p>郷土の文化財を学べる機会として、夏休み等の時期や対象者によって内容を工夫するなどのうえ、文化財の展示会や教室を開催する。</p> <p>常に「取組の情報発信」と「人材等の情報受信」の意識を持って、郷土教育の様々な素材・コンテンツの充実と、HPや広報等の発信ツールの活用を図る。</p>

論点、切り口	第1回会議(8/11)での委員意見等	第2回会議(9/5)での委員意見等	第3回会議(9/26)での委員意見等
<p>●小学校(幼少)の時期を中心とした体験教育、「本物」に触れる教育</p> <p>・その意義、あり方</p> <p>・手法</p> <p>など</p>	<p>当幼稚園の現場からいうと、園を出たすぐ近くの地域で、たとえばお饅頭屋さんで親子が いっしょに饅頭作りを体験している。そして小学校へあがってもそうした経験が生きて、積み重ねられていく。</p> <p>・幼稚園が地域へ出て行き、地域と触れあうと、次は子どもを通して家庭と地域がつながる。その補完的なつなぎ役を、幼稚園や学校が果たすべきではと考えている。</p> <p>・本物はやはり心に響く。興味を持ち関心が深まることが大事で、小さい時の体験ほど良い。</p> <p>・小さいときに経験したことは、大人になり、歳をとってからのアイデンティティになっていく。</p> <p>・学年ごとに決めるというより、どこかで触れる機会を、量ではなく質的な面で、本物に触れて心を醸成できるような機会を、小さい時に作る事が大事だと考える。</p> <p>・また、子どもたちもそれぞれであり、皆が皆同じものと同じように関心を持たなければならぬのか、ということも考えるべきである。全部に関心を、とると先生・大人側の負担も大変なものになる。</p> <p>・気づかせると言うことは難しい。</p> <p>・小さいときにどどん体験させると、大人になったときにその経験が甦る瞬間がある。</p> <p>・親子で何か一緒に体験するということは、親も子ども一生懸命になる。そのことも大事である。</p> <p>・郷土教育というのは目標なのか、郷土に愛着を持つことが目的なのか、方法論がメインなのか分かりにくい。</p> <p>・中にいると、三重県のよさはなかなか分からない。</p> <p>・本物のカテゴリーというのがあると思う。自然であったり、食べ物であったりとか色々あるが、その人の苦労が見えるものが本物である。お金をかけたものではない。</p>	<p>・本物に出会わせる体験を小学校の小さいときにさせておくことは本当に有意義なことである。</p> <p>・幼稚園、幼児期において、年上のお兄さん、お姉さんが体験していくのにつられて体験していくという、「つられ体験」も大変重要である。</p> <p>・地域において、誰かが小さい子の面倒を見てくれて、色々な年代の子どもたちが交じり合う中で体験できることは、インパクトがあり心に残るため、こうした視点で、郷土の文化を学んでいく取組を支援すると効果的ではないか。</p> <p>・保育園や幼稚園の時期の、素直に受け止める時期の体験は記憶に残るため、有意義である。</p> <p>・たとえば、農山漁村に1泊でも泊まりながら食文化体験してみるなども有意義ではないか。体験学習を泊まりで経験させると、子どもは変わって帰ってくると実感する。</p> <p>—</p> <p>・小学校における郷土教育は非常に子どもにインパクトがあり、その時期の体験・経験が郷土教育の根幹となるため、より小中学校における郷土教育を充実させていくべきである。</p> <p>・既存の郷土教育のやり方、情報発信は一方向的である。子どもと対話する双方向、あるいは子ども同士など多方向でやり取りできる教育の視点も重要である(再掲)。</p> <p>・たとえば、外国の子どもが三重県に来て、県文化から体験するというのではなく、市町単位での文化体験・交流をするのではないか。</p> <p>・外国人の文化体験で、伊賀の場合、忍者もあり、三重県の伊賀ではなく、伊賀忍者から入る(再掲)。</p> <p>・たとえば茶道なども地域ごとに特色・違いがあり、同じ道文化であっても、地域で異なるものに触れることも、自らの地域への理解を深めるうえで大事なことである。</p> <p>・たとえば食文化で、三重のひじきは他県のひじきとは味が違うが、試食体験のようなことを、地元でやれば地域の食文化に触れさせることが出来る。</p>	<p>・三重のよさ、自らの周りの地域のよさを知識として習得していくことも大事であるが、そのことが、知識に加え、自分の心のよりどころ、人と人とのつながりといったところに結びつくことも重要な様子であると思う。</p> <p>・物事に共感したり、人や社会とのつながりを実感したりできるような郷土教育、体験教育を、たとえば、小中学校のカリキュラムの中でどれだけ取り組んでいけるか、高校の部活動においてどのようにできるか、といったことが、子どもたちの興味や関心につながっていくのではないか。</p> <p>・子どもの小中高の発達段階で、「地域」の捉え方を明確にすべきである。</p> <p>・まず、いろいろなものや人との出会いがあり、子どもたちが興味を持っているのかどうかということがある。すべてに興味を持つことはできないが、単に知識として入ったということではなく、子どもたちが、自発的に興味や関心を持ったかどうか、そしてそれを、温めて継続して持ち続けられるかどうかが重要である。</p> <p>・国際的な視野からは、外国人との触れあいというのも、英語教育という面とあわせて、心の教育という面でも重要であり、小中学校から高校段階で、今県が進めているような取組があることは大変良いと思う。</p> <p>・「道」の文化は、特に茶道などは、地域によって違いがあるというものではない。地域ごとでやっている年代や盛んな流派に差があるということはある。「地域によって異なる文化として」触れる、という意味合いになるのではないか。</p> <p>・外国人が日本をどう見ているか教える必要がある。そうすることで、日本人としての誇りをもって、外国人と接することができる。</p> <p>・子どもの小中高の発達段階で、「地域」の捉え方を明確にすべきである。</p> <p>・郷土教育のめざすところ、行き着く最終的なところは、その人の「アイデンティティ」形成であると思う。</p> <p>・国際的な視野から見たとき、英語の文法をやっても面白くない。たとえば、地域の食材、食文化などは、外国人相手でも、紹介・説明しやすく、相手にも受け入れられやすい。人と人とのつながりを作るには格好のものである。</p> <p>—</p> <p>—</p>
<p>●地域資源の活用</p> <p>・施設</p> <p>・伝統工芸</p> <p>・史跡・文化財など</p>	<p>伊賀市の子どもたちは、夏休みは芭蕉さんの施設を無料で回れるスタンプラリーの無料園券があり、親子が一緒に回れるという仕組みがある。親子で行けるよう、たとえば、学校単位、保育園単位で、地域へ出て行けるバスなどの交通手段があれば、もっと施設・資源の活用ができる。新県立博物館にも同様のことが言えるのでは。モクモクファームでは、送迎のバスを出している。</p> <p>・鳥羽では恐竜の化石という資源があるが、子どもたちが泊まりで福井の恐竜の化石の博物館見学に行ったり、他の地域でもいろいろな体験ができるツアーがあり、そうした経験で地元の鳥羽と、他の地域を織り交ぜて学んでいる。そうした子は津で見つかったミエゾウの化石に興味は湧くなど、関心が広がっていく。</p> <p>—</p>	<p>・伊賀の、芭蕉、くみひも、伊賀焼き、忍者と、博物館に映像があり、もっと有効活用すべきである。</p> <p>・外国人の文化体験で、伊賀の場合、忍者もあり、三重県の伊賀ではなく、伊賀忍者から入る(再掲)。</p> <p>・「道」のもの、たとえば伊賀や松阪は茶道文化が盛んであり、地域ごとに異なる道の文化に触れることも大切である。</p> <p>—</p> <p>—</p>	<p>—</p> <p>—</p> <p>・食材や食文化は、自らの郷土のことを語って紹介しやすい、人とのつながりをつくる上でも重要な地域資源、コンテンツである。</p>
<p>●人材の育成・活用</p> <p>・地域の人材</p> <p>・教職員</p> <p>・コミュニティ・スクール</p>	<p>・本物に触れる、体験させることのできる機会を、どこで、どれだけ作ってあげられるのか、学校か、地域か、家庭か、その子にとっていいタイミングで、誰が(どこで)そうした機会をプレゼントしてあげられるのか、だと思ふ。いい先生がいることが一番。</p> <p>・保護者、地域への啓発はどうなのか? 先生がいいことを教えても、地域で間違ったことを教えてしまうこともある。保護者も頑張っていたら、子どもも三重県への愛着を持てるように思う。</p> <p>・保護者が三重県に愛着を持たなかったら、子どもも持たない。保護者がいい県だと思えば、子どももそう思う。</p> <p>・地域に絵や書道の達人など人材はいる。そういう方を活用しないのはもったいない。</p> <p>・高校の場合は、校区が広いためなかなか難しい面もあるが、逆に言えば、広い分だけ、動き方によっては、郷土教育のための人材の確保できる面もあるように思う。</p> <p>・地道に、地域に対して、何か協力できることはないか、ちょっとしたことでも、学校が出来ることを考えてボールを投げていくと地域から反応が出て、それに対して学校が出来ることが見つかる。そうしたことから進めていけば、広がりが徐々に出てくる。</p> <p>・紀南高校では、地域の文化財の案内地図を美術部の生徒が協力して制作し、地元の方に大変喜ばれた。</p> <p>・たとえば、退職した人の中にもさまざまな職種・経験をされ、すばらしい能力、エネルギーのある人がおり、そうした人々をどう活用するかが重要である。</p> <p>・能力ある人に入ってもらうために、敷居を低くする工夫、仕組みづくりが要る。</p>	<p>・郷土教育推進のための人材の確保、教職員の資質の向上が重要である。</p> <p>—</p> <p>—</p> <p>—</p>	<p>・退職者の情報など、人材バンクのある地域もあり活用出来る可能性がある。</p> <p>・鳥羽市の小学校で、お茶や着付けを教えるサークルを作ってボランティアで支援しているが、10年間続いているのは1校のみ。授業時間との関係で学校へ入っていくのは簡単ではない。総合学習の時間等に地域のボランティア等の人材が関わることができれば、学年全体にも行き渡ることもできて良い。</p> <p>・学校の先生がその地域の文化を知ったところに、異動で変わっていくのはもったいない。なかなか違う所へ行って、また、その地域の本物や文化を知り理解を深めていくのは時間がかかる。</p> <p>・たとえば防災コーディネーターのような、県が主導的に郷土教育にかかる専門人材を養成するシステムを検討してはどうか。</p> <p>・学校において、良い郷土教育の取組事例があっても、その先生だけにとどまっているのはもったいない。教職員間でしっかりと情報共有することが重要である。</p> <p>・高齢化の中で、伝えていくことの大事さとか、自分たちの地域の良さを知らないことが多いという状況であるが、学校の先生が、その地域の歴史や文化など、郷土のことを全部教えるというのは不可能である。</p> <p>・各市町が、学校を、先生が教えていけるために支援していく体制づくりが必要である。</p> <p>・市町に専門人材を配置することなども検討できないか。</p> <p>—</p> <p>—</p>
<p>●職場体験、インターンシップ</p>	<p>・インターンシップでモクモクファームが受け入れているのは、内閣府事業としてのもの、また大学生が、あるいは地域の小中学校から連絡があったり、という形である。</p> <p>・農村の文化というか、伊賀の文化に触れるという面もある。</p> <p>・中学生の職業体験として毎年2-3名を預かっているが、生徒の質について、生徒の割り振りというか、やり方を考えなければ、受け入れ先がなくなるかもしれない。</p> <p>・紀南高校では、2年生の1年間を、毎金曜日にインターンシップを行っており、その成果は生徒間で差もあり評価は難しいが、学校だけではなく、地域社会に出る1年間のそういう時間があることは意味が大きい。</p> <p>・職業体験は、キャリア教育というより、どちらかというと郷土教育に近い部分もあるのかもしれない。</p> <p>・インターンシップや職場体験を通じて、郷土の歴史、文化を知り愛着を育む面がある。</p>	<p>—</p> <p>—</p> <p>—</p> <p>—</p>	<p>—</p> <p>—</p> <p>—</p> <p>—</p>
<p>●教材、カリキュラム、</p> <p>・「三重の文化」</p> <p>・「美し国かるた(仮称)」</p>	<p>・せっかくの教材冊子「三重の文化」は中学生全員に広く配布すべきである。算数の教科書は捨てても、この冊子は、親は捨てずに子どもに渡せるものだと思う。</p> <p>・子どもたちに関心を持たせること、体験できることは大事であり、本物の重みを感じさせる、その機会をどう作っていくのか、地域がやるのがよいのか、学校がやるのなら、カリキュラムの中に組み込めればよいと思う。</p> <p>—</p> <p>—</p> <p>—</p> <p>—</p> <p>—</p>	<p>・「三重の文化」の映像版があれば、読むだけでなく、見て聞いて学べて良いと思う。</p> <p>・「三重の文化」に、もっと子どもの探求心をくすぐる一文や、探求のヒントを少し入れると良い。</p> <p>・モクモクファームにおける食文化体験活動も低学年から始めているが、低学年と、3・4年生、高学年と、分けてカリキュラムや内容を考えていった方がよい。</p> <p>・まちの文化や、お祭りごとについて、学校単位で取り組んでいける方法があれば良い。</p> <p>・「三重の文化」をベースに、いろいろな情報発信ができる(再掲)。</p> <p>・たとえば、調理実習において食文化を学ぶなど、さまざまな普段の教育で郷土教育は可能である。</p> <p>・かるたについて、国際的な視野も含めて考えると、たとえば中学生くらい向けには、説明書きを英語で書くなどしてみるのも英語に触れ覚える観点で一策かもしれない。同様に、小学校、幼稚園でも、わかりやすい表現など、工夫してみる価値はあるのではないか。</p> <p>・群馬県の「上毛かるた」も、県内各市町から平等に掲載ネタを集めるというよりも、後世に伝えたいものを取り上げていると思われ、また、説明書きにも礼節の心得や、ちょっとした遊び心をくすぐるルール紹介等も入っており、「美し国かるた」も、こうしてことをいいと取り上げていけば良い。</p> <p>・高校生に「三重の文化」の映像版を制作してもらってはどうか。</p> <p>・「三重の文化」で、たとえば松浦武四郎の紹介に「北海道の名付け親」のキャッチコピーがないのはどうなのか。そうした、ひきつけるものがないと、まず読もうという気になりにくいと感ずる。</p>	<p>—</p> <p>—</p> <p>—</p> <p>・前回意見も出たが、かるたはまず完成をめざすのではなく、双方向多方向でやり取りしながら制作することを検討してほしい。</p> <p>—</p> <p>—</p>
<p>●情報発信</p> <p>・メディア活用</p> <p>など</p>	<p>—</p> <p>—</p> <p>—</p> <p>—</p>	<p>・「三重の文化」をベースに、いろいろな情報発信ができる(再掲)。</p> <p>・既存の郷土教育のやり方、情報発信は一方向的である。子どもと対話する双方向、あるいは子ども同士など多方向でやり取りできる教育の視点も重要である(再掲)。</p> <p>—</p> <p>—</p> <p>・観光分野でよくあるような、たとえば中学・高校生になってくれば、自分たちが興味を持った素材を動画・映像制作して発信するようなことを郷土教育の中で実践できれば面白い試みになる。</p> <p>・ゆるキャラの中には郷土の文化の要素も入っているものもあり、そうした感覚も取り入れれば良い。</p>	<p>・マスメディアの活用による情報発信も心がけるべきである。人材の掘り起こしにもつながる。</p> <p>・学校が地域へ情報を発信していけば、地域の大人も、子どもの関心や興味を知ることができ、大人も、子どもたちのために何か協力したいと思うはずであり、積極的に地域へ情報発信していくべきである。</p> <p>・新聞などのメディアによって自分たちの取組が発信されることで、子どもたちにとっては評価となり、励みにもなる。</p> <p>—</p>